

はつ、こい

七 海

木箱の蓋を開けて、中をそつと覗き込む。生成り色の長方形が見えると、知らずのうちにはつの口角が上がった。自分の口元が緩んだことに気付くと、誤魔化すように咳払いをして、きよろりと周囲を見渡す。人気がないのは既に木箱に辿り着くまでに確認済みだったが、念には念を入れた。

それから漸く、ほどよく陽に焼けた腕を差し込んで手紙を抜き取った。表には線は細いが綺麗な字で、「ほたるさま」と書かれている。はつはそれを大事に懐へ仕舞うと、気持ち小走りに帰路を急いだ。

「ほたるさま」ははつのことだ。はつは城下町から東にある町の旅籠屋の長女として生まれた。奉公には出ず、幼い頃から今の十七まで家業手伝いをしていくものの、父の蔵書を読むことのほうを好んだ。ただ、客の与太話を聞くこと

は好きだった。それから、通っていた寺子屋の先生の話を聞くのも、友人たちの話を聞くのも須らく好きだった。自分が話すよりも、人の話を聞くことのほうがよかった。読書と同じで、自分の知らない話は勿論、考え方の多様さを知る事、目に見えない相手の気持ちや感情が言葉になって触れられる気がした。

結局、話を聞くことを続けたいあまりに親に内緒で人の話を聞く、所謂愚痴聞き屋で手間稼ぎを始めた。愚痴聞き屋とは言え、世間一般の同業のように対面ではなく、やり取りは手紙のみ。そのうえ、手間稼ぎと言うが愚痴を読んだ報酬は一人につき饅頭一個程の金額だ。はつは金が欲しくてやっているわけではないので、慣例として金額は書けども、強制はせず、お代はなくとも結構などという消極的な愚痴聞き屋だった。それが功を成したのかはわからないが、いつのまに

か密かに手紙の愚痴聞き屋は広まり、設置した手紙受け代わりの木箱には月に二度程、一通ないしは三通ばかり入っていた。愚痴だけではなく、日々の悩みや報われない恋への葛藤、他人への怒り、はたまたあまり面白くない小話など、匿名性故か手紙の内容は多種多様だった。はつ自身、名乗ることはしていなかったが、いつの間にか蚩橋の近くに木箱がある故で、「ほたる」と呼ばれるようになっていた。

はつにとつて天職ともいえる手間稼ぎだったのだが、誤算だったのは思ったよりも夫婦の明け透けな愚痴や浮気、嫁姑間の諍いなどの手紙が多かったことだ。相手もまさか手紙の先にいるのが齢十七の娘だとは思っても見ないのだろう。伏せ字等をすることもなく、のびやかに書いてくれていたおかげで、はつは恋も知らぬうちに、身近な愛憎劇に触れて耳年増になってしまった。

そして行き着いた先は「恋なぞするものではない」だ。近所の幼馴染は初恋がどうだとか、誰が良いだとか話をしていくが、はつにはあまり良いものに思えない

も含めて手助けをしたら何度も頭を下げて礼を言った姿が謙虚でよかったです。

はつは耳が熱くなるのを自覚した。恥ずかしさで指に力が入ってしまい、くしゃりと手紙に皺が寄る。

「おったんや」

呟いた声は震えていた。知らぬ間に顔を合わせていたことを知るのには、手紙を読んでもよくあつた。どうも生活圏が近いようで、昼日中の使いや、寺子屋への差し入れなどもよく見られていた。最初は違う娘だと思っていたのに、手紙を交わせば交わすほど自分自身でしかなくて、初めて他人から恋心をぶつけられていると気付いた時は戸惑った。恋なぞするものじゃないなどと思つてはいたのだが、いざ現実自身へそれが舞い込んでくるとどう扱えばいいかわからなくなつてしまう。無碍にするのも気が引けるのだ。とは言え名も顔も知らぬ相手なので、はつ自身対応のしようがない。

「おったんやつたら、声かけたらよかつたやん」

自然と出てきた言葉は、本心だつた。

はつはいい加減やきもきしていた。なにせ手紙では「ほたる」に、はつの事が好きだと言つてのけるくせに、当の本人にはなんの行動も起こしてこない。書いてあるように、物を落として周囲の人に手伝つてもらつたことが実際あつたのだが、あの数人の中のどれが手紙の主なのか、わからぬ。男は五人ほどいた。一人は簪屋のご隠居だったので除外にするとして、それでもあと四人は青年であつたし、どれもこれも身なりが良かった。綺麗な紙を使い、文字も綺麗に書くのだからきつと金持ちなのだろうと見越してのことだ。本多城下には大店はいくつかあるし、侍屋敷だつて数十ある。

もやもやしたものを抱えながら、はつは新しい紙と筆を取り出し、硯に墨を溶いた。いい加減話しかけてはどうだと「ほたる」から言つてみよう。助言などはいらぬと思えば、向こうはもう手紙をよくかさなるだろうけれど、それならそれでいい。駄賃自体は既に前回包んで貰つていたからだ。さらりと茶墨の文字を生み出し、そつと仕舞つておく。また後で散歩にでも出た際に木箱へ入

れておこうと考え、はつは家事手伝いに向かつた。

「はあ？」

思いがけず大きな声が出たことに、はつ自身が驚いた。廊下に繋がる襖をちらりと見たけれど、動くことはなかつた。ほつとして、もう一度手紙に目を落とす。そこには流麗な青光りする文字で「やつてみます」とある。やつてみますとは、なんだとは思わない。「ほたる」が好きなのへ行動を移してみるよう助言をしたのだから。

この手紙がいつ投函されていたかは定かではないが、はつが手紙の返事を木箱へ入れてから約五日は経つている。もし、はつが返事をしてから同日に手紙を返していたらば、そんなことを思いつつ、手紙の中には他に文字がないのを確認する。もう手紙を交わすことは必要ないということだろうか。それならば別件で入つていた、とある女性からの夫の浮気についての愚痴文を返していこう。ひとまず想われ人からの手紙を文机の隅へ追いやつて、新たな紙を出して愚

痴文への返事を書く。新たな手紙曰く、常盤の方に最近できた茶屋の看板娘に夫が現を抜かしているとかで、酷く内容は荒ぶっていた。

いつものように、手紙の主へ共感をしておくだけに留めたはつは、綺麗に文を置く。まだ一通目なので銭の事は何も書かなかつた。懐に手紙を入れておき、そのまま自室を出て階下へ降りる。

はつの旅籠屋は珍しく二階建てだが、客を二階に泊めるのではなく、二階に家族が住んでいるからである。他の旅籠屋はもつと敷地面積が広いのでのびのびとしていて、経営主の家族も庭の隅に離れを持っていたりするのだが、はつの家はそこまで広くない。二階は物置兼家族の部屋、一階の台所付近に勝手座敷が並び、ミセニワから土間を続いてウチニワ向こうに客が泊まる部屋がある。二部屋のみだが、それで充分経営は回っているようで、はつの両親はあまり不平らしい不平を零さなかつた。

階段を降りると板の間の帳簿机に父が座っていた。はつが近寄ると、帳簿と算盤を弾く手を止めて柔和に微笑む。

「おお、どうした。母ちゃんなら女衆と萱の畑に行つとるよ」

「うん。手伝うことある？ 今日のはちよちゃん休んどるやろ」

はつの家は奉公人が二人と少ない。家族経営で回さなければ赤字になることがあるからだ、そもそも勝手座敷が少ないのだから奉公人を増やすこともできない。故に少数精鋭なのだが、奉公人が風邪などで寝込んでしまうと、途端に目まぐるしいほど忙しくなるが、はつと弟がどこかの本店へ出ることもなく家業手伝いをしているため、人足不足を嘆くことはない。料理は弟と母が行い、帳簿や客選定は父が、他の雑事を奉公人とはつがやる。伊勢街道から離れているとはいえ、目を剥くほど遠くはないので、それなりに伊勢参りに行く旅行人達が泊まつていく。泊まつていくとはいえず、木賃宿程人が多いわけもなし、充分六人で回せていた。

だが今日は奉公人の一人であるちよが朝から腹痛で臥せっていた。心配した母が近所の医師を連れてきて診てもらったところ、月のモノによつて痛むの

だろうと判断を下された。ちよに初潮がきたことに母は喜び、痛みが治まれば三日ほど実家へ帰省してもよいと伝えていた。明日にでもちよは、荷物を纏めて一時帰省をする。いくら普段はのんびり家業手伝いをしているはつでも、明日以降忙しくなることはわかつていた。今日だつて同じで、ちよは戦力外だ。はつは自分の月経はそんなに辛くないのだが、個人差があることは母から聞いていたうえに、いつも元気な二つ下の彼女が寝込むほどのだから余程なのだと理解している。

父は暫く考えるように唸つた後、とちよあえずはつに、店先の掃除を任せた。おとどさんには弟がいるし、はつは料理が苦手なので邪魔になる。客間の掃除と洗濯はもう一人の奉公人であるクマがすませている。言われた通りに店から出て土埃が玄関周りに溜まらないよう掃き、まだ涼しい内に水を撒く。もうそろそろ夏がやってくるので、通りには枝豆売りなどが現れて賑やかになるだろう。

ふ、と自分の足元に影が差した。見上げれば上等な着物を着た男が立っ

た。はて、泊まる店を間違えてやいないかと思つたが、男はしつかりとこちらを、いやはずだけを見ていた。はつも思はずじいっと見返したが、男の顔が見る見るうちに赤くなつていくのを見て察した。目の前の男こそが、手紙の相手なのだ。ちらりと視線を落とせば、刀まで携えている。上流であるとは思つていたが、まさか武士だとは思わなかつた。男は何度か口を金魚のようにしていたかと思えば、ぐつと真一文字にして目をかっぴらいた。その劍幕に、はつは文字通り体ごと引く。

「あの！」
腹の底から出したような声に、斜向かいの店から数人が顔を出した。声をかけられたはつも目をまん丸にする。なんとか、消え入るような声で返事をすると、男はぱつと顔を輝かせる。

「んん、あの、ですね、ええと」
「……はあ？」

庄に押されて引き気味だつたはつは、次第に男の、真つ赤な顔でじどろもじどろになっている様を見て呆れ返つてしまつた。これが男の、宗矩との出会い

だつた。

夏が真つ盛り、路上でアブラゼミが腹を見せていると思えば、唐突に蠢いてけたたましく鳴き喚く。はつはそれをなんともない顔のまま箒で塵取りに入れると、草つ原の方へ放り投げた。近くで見ている宗矩が感心したように息を出す。そちらへ顔を向けると、宗矩は挙動不審になりながら板の間の父の所へそそくさと逃げて行つた。

初対面以来、宗矩は、しよつちゆうはつこの旅籠屋に来るようになった。泊まりにくるわけではなく、ミセ前で突つ立つていることもあるし、板の間で父と談笑している時すらある。おかげで近所からは「才助さんとこが用心棒を雇つた」などと言われている。そうではないのだが、父が否定も肯定もしないので自然とその説が流布し、なぜだか旅籠屋には少しだけ身なりが良い客が泊まるようになった。侍が常駐しているような旅籠屋なら不用心なことは起きまいという心理からだ。そんな周囲の考えなどつゆ知らず、用心棒と言われた宗矩は、ただは

つに逢いに來ているだけだつた。最初は父も訝しんだが、刀を差した侍という点で無碍にできず、当たり障りなく会話をしているうちに宗矩にすっかり毒気を抜かれたようで、今では帳簿のつけ方なんかを教える始末。はつが咎めたところ、「宗矩君が知りたい言うたんやから、教えてもええやんか」と飄々と答えた。いつの間にか名前で呼ぶような距離になつたらしく、はつは呆れた。

あれから宗矩から「ほたる」への手紙は一切ない。では、はつへ何かしら心を打ち明けたのかと言えばそうではない。二日に一度、店に来ては噂通りの用心棒かのように突つ立つては、はつを視界に入れ、時折父から帳簿や算術を教わつたりしているだけだ。毒にも薬にもならないので、はつはあまり気にしないように過ごして幾日か経つた。

相変わらず煩いセミを店前から掃ぎ、忙しなく動くちよとクマを見ていると、自分にも視線があるのに気付いてそちらへ顔を向ける。格子窓の向こうから父の隣にいた宗矩が、路上にいるはつを見ているようで、バチリと視線が絡んだ。

はつは視線を逸らさないが、宗矩はあまり日焼けしていない白い肌を首まで赤く染めて瞳を左右に動かしした。

わかりやすいなあ、と心の中で呟きながらウチニワまで移動すると、井戸の前にいた母が申し訳なきように両手を合わせて弟に何かを頼んでいる。気弱なはつの母は、自分の子供であっても威張ることはおろか、説教すらままならない。代わりに祖母が恐ろしく怖かったので、はつも弟も母には甘えていたがバカにすることは絶対になかった。はつが近寄ると、弟が視線をよこしてきた。それから、芝居がかつたようにボンと手を叩く。

「そうや、姉ちゃんに行つてもらおう。俺はまだ仕込みせなあかんし、母ちゃんも手伝つてくれな、今日は客が多いからさばけへんしなあ」

急に話を振られたはつは眉を顰める。しかし母までもが、今度は申し訳ない顔のままはつを見るものだから、溜息を吐きたいのを飲み込んで頷いた。

「よくわからんけど、ええよ。なにすればいいの」

聞けば、矢橋の畑へ野菜を取りに行くことだった。本来は矢橋の女衆が売りに来るのだが、今回は母のほうから早めに大量の発注をしたことで人足が足りず、物はあれども全てを持っていくには今日では無理なので後日にしてほしいと、村で足の速い子供が教えに来てくれたそうだ。はつはそれならば私一人では無理に決まっていると、弟へもう一度振ろうとしたが、どこから聞いていたのか、後ろから宗矩が出てきて、はつと一緒に己も行くと言いつ出した。結局、はつが口を挟む間もなく宗矩が大八車を借りてはつと一緒に村へ向かうこととなった。

ガラガラと空の車を引きながら、はつと宗矩が一緒に歩く。何も乗っていないのでまだ軽いのが、帰りに野菜が乗ることを考えればはつ一人では到底無理な使いだつたというのに、なぜ弟はあんな無茶ぶりをしたのだろうかと考える。ちらりと隣を歩く、一見あまり筋肉などついていなさそうな宗矩を見て、弟のにやけた顔がはつの脳裏に浮かんだ。弟は宗矩の恋心に気付いていて、なにかとはつと一緒にさせようとしてくることがある

ので、今回のもその類か、と呆れた。

「……あ、あの……なにか」

正面を見据えたまま、宗矩が呟くように口を開いたので、はつはきよんとするが、すぐに自分が宗矩をじつと見ていたことに気付いた。

「あ、いえ、……お侍様に、野良仕事のようなことをお任せして申し訳ないな、と」

「あはは、気にせんでください。儀礼として刀を差しています、私も多いですと、手間稼ぎに出ている者は多いのです。大工ですとか、それこそ用心棒や、いい処ですと剣道場の師範などもあるように」

「はあ……ですが、石川様は手間稼ぎではなく、完全にタダ働きですが」

口が悪いのは重々承知なのだが、はつは宗矩相手にあまり媚び諂うことはしたくなかつた。そもそも二日に一度、はつの旅籠屋へ今やまるで常連のように顔を出すこの侍は、はつの目には放蕩息子に映っている。はつの微妙な濁りの目を見て察したのか、宗矩はお得意のように視線を左右にウロチョロさせた後、

その隆起した喉仏が上下に動くのが分かるほど生唾を飲み込んだ。

「ええと……その、私は五男のうえ、所謂母は妾というやつでして」

唐突に始まった自己紹介に、はつは間抜けた声で返事をする。アブラゼミが煩くて、宗矩の声はかき消され気味だ。宗矩の額から汗が滑り落ち、上質な着物の衿に落ちた。綺麗な横顔だと、はつは思う。

「その、あまり家督に関しては期待をされていないと言いますか、その、兄達に比べれば充分過ぎるほど自由な身では、あります。一応藩校にも通ったのですが、戦のない平和な世ですので、五男坊など取り立てて騒ぐほどでもなく」

「……はあ」

またもや間抜けな返事をしてしまったが、はつは内心では宗矩の事情を初めて聞いたなあと一応普段よりも耳を傾けている。ガタガタと大きめな石を踏んで車が軋む。それを手元でいなしなから、もうすぐ着く村まで一生懸命二人で車を押す。

「っ、つまりですね。私の身は自由と

いうことでありまして！」

威勢の良い声はそれ以上続くことなく、赤い顔のまま宗矩は黙ってしまった。はつは返事もせずに胡乱とした目で宗矩を見上げる。だからなんだというのだと口にしたいのを我慢して、はつは「もうつきます」などと言ひ会話を切った。

はつとしても、そろそろ言葉にして何かしら行動を移してもよいのではなからうかと思っている。だが現実の宗矩は顔を合わせてお互い名乗ってから、全く進展がない。全くもって何がしたいのかわかりかねで、いよいよもってどうでもよくなりつつあり、しまいには「恋なんぞ」と内心で腹が決まりだしていた。はつが無理に切り上げたことに気付いてはいるが、宗矩はそれ以上何を言うでもなく、大人しく村まで車を引き、畑にいた名主から大量の野菜を受け取ると車まで運んで括り付け、二人で何度も頭を下げて村を後にした。帰りの道中は静かなまま、時折宗矩が溜息を零す音とセミの声、川の潺だけが聞こえていた。

夏が終わった頃、宗矩に縁談が来ているとはつが聞いたのは、父からだった。

はつよりも父の方が今では宗矩と一等仲が良く、宗矩も自身の事などあれこれ相談をしているようであった。その中の一つの相談に縁談の断り方があったそうだ。はつはそれを聞いてそっけない返事をする、すぐに自室へ上がった。文机の横にある小さな箱を開くと中から数枚の手紙が顔を出す。蛭橋の木箱に、久しぶりに宗矩から手紙が入っていたのだが読まずに置いていた。それを開いてみると、やはり中身は縁談が来ていることと、自分は旅籠屋の娘を慕っていることで断りたいことが書き連ねてあった。ただ、「ほたる」の傾向を知っているからこそ、そこにどうすればいいかなどの言葉は何もない。その助言相手に、はつの父を選んだのだろうか、まさかはつのことを慕っているなどとは正面切つて言うまい。そう思っていると、襖の外から父の声が聞こえた。手早く手紙を片付けて返事をする、眉間に皺を寄せつつも、困ったような顔の父が入ってきた。どうしたのかと問えば、父はうんと頷い

てはつの向かいの座布団に座ると、ゆっくり息を吐きだす。

「それがなあ……なあはつ、お前は好いた相手などおらんのか」

内心、うわ、と思つたが顔には出さず、はつは顔く。かりかりとこめかみ辺りに下がる髪元を搔けば、父の視線がそこへ集まる。

「うーん。そうか。まあまだ十七やからなあ……。あと二年ほどか……。その、お前、宗矩君はどう思う」

「石川様？」
これは、まさか正面切つて宗矩が父に告げたのだろうか。はつに面と向かつて何も言えない根性無しが、想い人の父という本人よりも高い壁の方へ先にぶつかりに行つたというのか。はつのその顔色を見た父は、はつが宗矩の気持ちを探していることに気付き、難しい顔をさらに難しくした。

「まさか、宗矩君からなんか、言われたんか」

「そんなわけないやん。なんも言うてこんし、そもそも会話すらちゃんとできてないのよ」

「じゃあ、はつは、宗矩君の気持ちを知つとるだけなんか」

「……まあ。そういうお父さんはどうなんよ。なに知つとるんよ。縁談の話まで相談されるくらい仲良しなんやろ」

はつが言い返すと、父はグツと黙る。黙つてから、腕組みをして低く唸つた。

「ちゃんと本人から聞いたほうがいい。ただ、まあ、父ちゃんはええと思う。向こうの家が許すんやつたらの話やけど。あの子は頭もええし、顔も悪ない。口下手なところはあんだけど、お武家さんやのに遠慮も配慮も弁えとる。良物件ではあるんやけどなあ」

父からの言葉はまるで見合いの釣り書きのようだった。はつは腹の底から何か熱いものが込み上げた気がして、それに気付くと自分で驚いた。なぜ父の言葉でこんなにも怒りが湧いたのだろう。父が宗矩の事をよく思っているのは解つていたはずだ。娘の気持ちを無視して、宗矩を薦めるようなことを言ってきたからだろうか。しかしはつの気持ちとはなんだ。はつは、別に宗矩の事を好いても嫌つてもいいし、他に慕う人もいな

い。それならば聞き流せばよいだけのはずだというのに、なぜ。

「なあ、はつ」

父が顔を緩めて、柔和に笑んだ。

日焼けしていない、白い顔で線が細い父は、昔は病弱だったらしい。はつが物心ついたころからは、臥せるどころか咳いたとこですら見たことがない。どことなく、宗矩と雰囲気似ていると思つた。あちらのほうが上背があつて筋肉もしつかりしているが。

「恋つてのは、嫌いか」

「なんなんよ」

「いやな、お前見とると、恋を嫌煙しとるように思えてな。しかしほら、お前は書物が好きやろ？ 『源氏物語』も『伊勢物語』も、恋物語は良いもんばつかりやないか」

「お父さんの大好きな『曾根崎心中』は最悪の悲恋やと私は思うけど」

はつが胡乱とした顔で怨嗟のように呟けば、父は困つたように笑う。

「いや、でもそれはほら、そのおかげで父ちゃんと母ちゃんは一緒になれたんやし、お前が生まれるちよつと前は

なあ、時代的にもそういうのが多かったんや」

はつの名前は、『曾根崎心中』の遊女からとられた。両親が浄瑠璃を観に行つたことが切欠で恋仲になり夫婦となつたことから、父は生まれた娘に自分達を結んでくれた物語の主人公の名前をつけたのだ。当然母は反対し、娘の名前に縁起でもないと言ひ募つたが、父が丸め込んだらしいことは、近所の産婆から聞いていた。聞いた当初は心底引いた。勿論父の言う通り、書物蒐集をしている父の蔵書を見ても、確かにはつが生まれる前後は心中事件が多く、それを題材にした物語集も沢山刊行されていたことはわかつている。だがはつも当初の母と同じく、自分の名前の由来が縁起でもないことに、多少なりとも反感はもつてた。

「庄之助やって、いい仲の娘がおるそうやに」

「だからなによ」

「いや、お姉ちゃんなんやで……」

はつはその文句が嫌いだった。名前の由来に触れそうな話題に加えて嫌いな

文句を発され、とうとう初の機嫌が急降下する。不機嫌になった娘に気付いた父は、自分の失言にも気付いたようで、軽い謝罪をしながら「まあ、色々考え」とそそくさと部屋を出て行つた。

秋も更けたころ、龍光寺では敷地内の美しい紅葉を見ようと町々から人が来て賑わつていた。すぐ近くの神戸神社も市が開かれ、いつもの厳かな雰囲気が消えて喧噪に包まれている。はつも、その中にいた。しかも、宗矩と共に。朝一に家に来たかと思えば、父の前ではつを紅葉狩りに誘つたのだ。紅葉狩りと言っても山や遠くの寺に行くでもなく、ちょうど秋市もやつていことだしと、龍光寺に行くことは宗矩の中で決まつていたらしかなかった。父は喜び、善は急げとつに支度をさせて文字通り背中を押し、宗矩へ預けた。

母が用意した落栗色の小袖を着ているはつは、両親のいらぬ気づかいにげんなりした。少し前を歩く宗矩は耳まで赤い。寒いわけではないので、羞恥か興奮か、と見ていると、くるりと振り返つた。

「あの、はつ殿。向こうで紅葉の天ぷらを出しているそうで」

「食べたいんですか」

「えつ。ええと……はい。あの、はつ殿がお嫌いじゃければ」

この男が侍だと誰がわかるのだろう。今日はなぜか刀すら差していない。武士の命は刀ではなかったのだからかと思うが、その辺りは個人の思想によるのだろう。当然、家などまるで興味がない宗矩にはあまり重大事項ではないようで、町人風の変装の様な着物まで着ている。眉目が良いからか、時折女衆に熱っぽい瞳で見られているが、本人は何も気付いた感じはなく、若干汗をかきながら、はつに紅葉の綺麗さなどを喋っていた。

「……宗矩様が食べてみたいんやったら、買いに行きましようか」

「ぜ、ぜひー」

今日の宗矩に合わせて、はつは苗字で呼ぶことはしなかった。折角変装していることをしているというのに、はつのせいでおじちゃんになつたら後味が悪いからだ。それでも初めて呼ばれた名前に宗矩は嬉しそうで、少年のような笑顔のまま

勢いに任せてはつの手首を掴んだ。人が多かつたからと、急いた心がそうさせたのだろう。けれどもすぐにその手首は離され、宗矩は茹蛸のような顔色でしどろもどろに謝罪し、気持ち歩幅を小さくしながら前を歩く。はつは溜息を吐きたくなつたが、あまりはぐれてしまつて、スリや暴漢にあつても嫌なので、小走りに追い掛けた。それから、宗矩の袖を掴まんで引く。目をまん丸にした宗矩がはつを見下ろし、金魚のように口を無意味にパクつかせた。

「はぐれたら大変です。魚屋も来とるみたいやし、あんまり遠いと舌が届きません」

「は、はい」
「ほら、天ぷら。神社のほうなんですよ？宗矩様が食べたいんやから、はよ行こ」

「はい！」
初めて会つた時の様な、大きな声で返事をしたと思えば、周囲の視線にすぐに大きな体を縮こませて俯きがちに歩きだす。それがなんだか可笑しくて、思わずはつは笑いを零していた。

はつの心に何かの変化があつたのは確かだ。神社へ天ぷらを買に行く道中も、漸く自然に会話が成り立つようになっていた。どうして本多様のお膝元なのに神戸神社なんやろ、というはつの疑問には、宗矩が丁寧に解説した。はつは自分が生まれる前、本多城と呼ばれる城が神戸城であつたことなど露ほども知らなかつた。興味がなければそういうものですよ、と宗矩が穏やかに笑つた。紅葉の天ぷらも美味しかった。サクサクしていて、味などほとんど衣につけてある出汁と塩のみだったが、赤い紅葉を食べているということだけで秋を食した気分になつた。市の為に、近隣にある菓子屋や小間物屋などの商人達も店を出て、厳選した品を境内や敷地内に広げているため、紅葉以外に見るものが沢山あつて目移りをする。紅葉が描かれた玉簪や櫛を見て、本物の紅葉より絵の紅葉に釘付けなのは如何なものかと思つた。楽しいのだからこれはこれでと割り切る。そう、はつは思ひのほか、宗矩と一緒に紅葉狩りを楽しんだのだ。

——あの人が浮気をしたのでどうにかして懲らしめてやりたいけれど、何をすればいいのかもわからない。嘆くしかない我が身が口惜しくて口惜しくて仕方がない。

そのように書かれた手紙を見ながら、はつは溜息を零した。所詮恋愛間どころか夫婦間の男女などこんなものである。この世に男女がいる限り尽きぬことのない悩みだ。いや、この手紙の主の「あの人」は衆道だつた。好いた男が扇屋の番頭と良い仲になつた結果、本気になつてしまつて恋仲だつた女が捨てられたというのだから、遣る瀬無い。男女どころか、性別など関係ないのだから、この世に人間がいる限り恋愛ことでのゴタゴタは付き物なのだ。このような手紙の内容は掃いて捨てるほど来る。やれどこぞの女や男に現を抜かした。やれどここの誰誰に寝取られた、捨てられた、挙句暴力を振るわれた。十七の身空でこんなにも恋愛ごとに対しての負の感情を中てられる娘もそういないだろうと、はつは自分自身を変に鼓舞する。

襖の向こうで声がかかる。今はもう夕

刻で、宿泊客も早い夜に向けてさっさと夕餉を食らうとみな静かに冬の夜を部屋で過ごそうとしている。父と母はまだ一階で奉公人たちと一緒に板の間と勝手座敷をうろうろしているのだろう。二階にいるのは弟とはつのみだ。声をかけてきたのは弟ではなかった。宗矩だ。こんな時刻までいたことがなかったため、はつは誰かを判断するまでに返事をしてしまったが、まあいいと腹を括った。隣室に弟もいるのでへたなことはいないだろうとの思いだ。

宗矩はそろそろと襖を開けて顔を出した。寝巻の上に綿を沢山入れた長い半纏を羽織ったはつを見て、自分が入ってきたくせに宗矩は頬を赤くし、挙動不審のまま敷居の上に正座をする。

「あの、寒いんでどうぞ中へ。襖を閉めてくださると助かるんですが」

「あつ、ああ。これは失礼いたしました。気が利かず……いえ、夜分に女子の部屋へ入る事すら無礼ですよ。重ねて申し訳ありません」

もう入ってきているくせに何を言っているのだと思う。思うが、はつは口に

出さずにただ宗矩を見つめる。どうせ父には了解を取っているのだから、自分がどうこう言うことはない。多少思うところはああるけれど。

綺麗な所作で襖を閉めると、背中がピタリと襖に引っ付いているのかと思う程の距離で座り直し、宗矩は膝の上で握り拳を作っては開きを繰り返す。はつが五度目の拳を見たところで、ようやく口を開いた。

「その！ ええと……ほ、本日は、はつ殿に、わ、私の想いを聞いていただきたく」

漸く告白か。はつはそう思うと自分も文机から向きを直し、正面を宗矩へ向ける。

「そのう……私は口下手なもので、あまりうまくは言えぬのですが、その、ず、ずつと以前より、はつ殿をお慕い申し上げておりました。い、いつお伝えすべきか迷いに迷い、なぜかこのような時間帯になってしまいましたことは謝罪いたします。本当はすぐにでもお伝え申し上げます。当たったのですが、意気地がないばかりに、延びて……。ただ、年だけはまた

ぐまいと思ひ、御父上殿にご相談をしましたらば、もうこの際だから今言つていけと背中を押されまして！」

飲んでいたのでな、とはつは見当をつける。階下できつと、夕餉を共にして二人で飲んでいたのである。はつは母やちよ達と早めの夕餉を食べたので、その場にはいかなかった。弟は最後までおくどさんにいたので知っていたらうに、二階に上がってきたときに何も言つてこなかった。姉の色恋に関して興味がないのはよくわかった。はつとて、弟の色恋には興味がないのだから。

はつが何も言わないのを不安に思つたのか、宗矩が赤い顔のままちろりと上目遣いにはつを見た。酒の匂いはしないので、宗矩自身は飲んでいないか、舐めた程度なのだろう。酔った勢いで来たわけではないことがわかり、はつは安堵した。そして、自分が安堵した感情に困惑した。

「あの」

「……石川様は、お侍様ですよ」

「え、あ、はい。一応。五男坊ですが」
「何番目かはどうでもいいんです。身

分が違いますし。石川様はお武家様同士で、ご婚姻なさるのが一番お家的にも、お母上のにもええんじゃないでしょうか」

「母は、その、自身が妾故、私にもそう言ってきましたが、父上様は兄上に家督を継がせるおつもりですし、出世欲もありません。五番目の私には他家繋がりでの婚姻も期待なさっておりません。そもそも私だけの後ろ盾もありませんし」

苦笑いを零した宗矩に、彼の母は下流の出ということがわかった。とはいえそういう出自の者こそ出世欲に駆られるはずなのに、この宗矩はそうではないようだ。はつを好きになることと言い、おかしな人間だと思っ。

「どうして私を」

「こう言うと、軽く思われるのが嫌なのですが、率直に言えば一目惚れなのです。貸本屋へ本を返すときに、はつ殿をお見掛けしました。そこで本の感想を主人へ述べているはつ殿がとても自由で、笑顔が可愛らしくて、そ、それから……」

宗矩は、はつに近付きたいと思い、店

主へ聞いた。そこで彼女が東町にある旅籠屋の娘であることや本が好きなこと、週に一度は来ることなどを知り、自分もその時期に合わせていたとか。声をかけたくとも生来の口下手と意気地なさか邪魔をして行動に移せなかったことはつに懺悔した。眉目がよい人間から可愛らしいと褒められたことは素直に嬉しいが、はつの根底にある恋の負に関しては払拭しきれない。

確かに約半年程、ほぼ毎日足繫く通っていた宗矩には大したものだと舌を巻く。いずれもはつを見るばかりで殆ど会話すらなかったの、普通ならば諦めるところだが、宗矩はそうならなかった。秋に行った紅葉狩りは確かに楽しかったし空回り気味の宗矩が面白くて、そうしてほんの少し可愛く見えたのは事実。天ぷらで口回りをベタベタにしていたのも、はつになんとかして簪を送ろうと試行錯誤した結果、はつから拒否されたので落ち込んだことも、はつには楽しい思い出だった。嫌いではない。悪い人間でないことは重々承知だ。

けれど。

「私が返事をした場合、石川様は、家を捨てられるのですか？ それとも、私が石川様の家へ嫁ぐことになるのでしょうか」

驚いた顔をしていたが、宗矩は緩く首を振った。

「私が家を出ます。私は藩に属していませんので、父上様も何もおっしゃることとはありません。それは御父上殿にもお話をいたしました。婿入りをさせていただきます。最初は流されましたが、私が家督を継ぐことはないこと、打刀は返上すると決めていると伝えらると、快諾いただけました」

「……変な人」

「え？」

「変やろ。普通身分落として町民になりたいなんて思う？」

急に言葉を崩したはつに戸惑っていたが、宗矩は嬉しそうに笑って頷く。

「はい！ はつ殿と一緒になればどのような身分であっても万感たる思いです」

今度は、はつは何も言わなかった。言わなかったが、恥ずかしい人だとは思っ

た。はつとしては武家の事なぞわかりようもないので、宗矩が言うように簡単に侍を辞められるのかは知りもしない。だが宗矩の様子から大丈夫なのだろうと想像がつく。はあ、と溜息を吐いた。

「私、恋は綺麗なもんじゃないうって知つとんのよ」

「最初は良くても次第に本性が見えるやろ。浮気に嫉妬、暴力沙汰、しまいは三下り半。好いた者同士が一緒になつたはずなのに、なんでかそうなつてしまふ。そんなら恋なんてせんでええやんつて思うのが近頃の私なんやけど」

「わ、私はそのようなこと一切いたしません！」

「最初はみんなそう言うんやろ？」
しかし、とは思う。この目の前の実直素直な男を信じてみたい自分も、少なからずいることに、はつは気付いている。かの小町とて、百夜通いを達成しそうだった男に心を動かされていたという程なので、足繁く自分の下へ来る者に絆されてしまうのは仕方がないのかもしれない。

はつは誰相手でもなく一つ頷き、後ろの文机に向かうと紙を出し、筆を滑らせる。見守る宗矩へ書き連ねた書を出して、筆も差し出した。

「私、来年には十八なんよ。あと二年もすれば見合い話ばかりになると思うの。そうなる前に、貴方と一緒になろうと思ひます。やから、恋仲兼婚姻相手ということにしてくれとありがたいんやけど」

つらつらと述べながら書面を見せるはつに、目を白黒させるのは宗矩だ。一先ず渡された筆は持ったものの、理解が追いつかないようで、畳の上にある紙とはつの顔を何度も見て暫くしてから、大きな声を出して飛びあがった。座つたままだというのに、器用な人だとはつは笑う。

書類にははつの綺麗な文字で、浮気をしないことやその他諸々、はつが懸念するものを禁止することが書き連ねてあった。それらは全て宗矩自身も否定していたことであつたので、宗矩は震える手で了承の文字と自分の名前を書き記し、筆をはつへ渡した。

「では、本日からよろしくお願いいたします。宗矩様」

「よ、宜しく、いや、ええと、こちらこそ、どうか幾久しくよろしくお願い申し上げます！」

盛大に大きな声だつたためだろうか、隣の襖から弟の拍手の音が聞こえてきた。急に恥ずかしくなつて、はつは宗矩同様、頬を赤くして、急ぎ気味に筆をしまった。

無言の空気の中、少し落ち着いた様子の宗矩が首を傾げながら書面を見返しているの、どうしたのだと問うと、ぽつりと「どこかで見つたような綺麗な筆運びだと思ひまして」と呟く。

気付きかけているのであればいいだろうと思ひ、文机の横の箱を漁り、数枚ある手紙を顔の前で広げた。

「宗矩様、私がほたるなのです。いつも熱烈な恋文をありがとうございまして。大切にしまつてあつたのですよ」
にっこりと、はつは初めて、宗矩へお手本のような満面の笑みを向けた。